

ポートランドの都市圏内に位置し、ミルウォーキー市と隣接しているオーク・グローブは、クラカスカウンティの中のものになっていない非法人化地域であり、自然に囲まれた住宅地域である。隣接するミルウォーキー市は、ポートランド市内中心部と都市圏郊外を繋ぐ交通ルートの南端に位置しており、過去20年間において急速な経済成長を遂げ、今後も人口増が見込まれているため、1999年から地域の開発で広域に計画的に管理する取組がはじめられ、2008年にポートランド市とミルウォーキー市を結ぶライトレール（マックス）の導入が決定、オーク・グローブは終着点となり駅舎の整備と1000台規模の駐車場が建設されることが決定された。クラカスカウンティは、旧来の文化や自然を守る風土の強い地域であり、マックス駅の開発に、このままではまずいのではないかと危機感を感じる住民が増えていくこととなった。

駅開発反対派の増加に伴い、公共交通の導入を進めようとする行政（メトロ（広域行政機関）・トライメット（公共サービスを提供する特別目的機関））がオーク・グローブに活動拠点を置き、メトロの他のプロジェクトでを通じて元々繋がりのあった、都市生態系を守り健康的なコミュニティづくりを目的に活動している「アーバン・グリーン」という組織に、計画に対する地元住民の同意を得たいとの申出がなされ、ここから地域住民の声を集めることがスタートする。

アーバン・グリーン自体は、住民の利便性、自然環境を考え、公共交通開業には賛成であったが、大規模な駐車場整備には反対の立場である。オーク・グローブは元々森林地域であったが、幹線道路も汚く、マックス開業、駅開発に併せて衰退している地域をこの機会に活性化させたいと考えていた。

アーバン・グリーンの創設者のチップス氏は、オーク・グローブに生まれ育った方ではなく、この地に移り住み9年という方である。駅開発に対する住民の声を酌み取るために最初に行った行動が、知人の伝を頼りに、地域に住む住民のドアを1つ1つノックしたことからはじまる。マックスの開業が決定されていること、このままでは行政が考える最も安価な計画通りに事業が進んでいくこと、何が欲しいのか、何を望むのか、家族や子どものためにこの地をどうしていくのかという疑問を投げかけ、住民の興味を引きつけることに尽力された。その後、事業の影響を受けるであろうすべての人々を対象に小さな集会を開催し、住民、関係者から出された要望を行政へ伝え、話し合いを進めていく。

その結果、地域から生み出された駅開発に関するアイデアがメトロの助成金プロジェクトとして位置づけられる。トライメットという事業を進めたい側をアーバン・グリーンのパートナーとして巻き込み、助成金を活用し住民の声を形にしていく体制が築かれた。この助成金の要件として60万ドルを地域が負担することとされたが、この部分を現金ではなく、“人がサービスを提供する”ことで事業要件をクリアすることとなった。

チップス氏が地域の声を集め、住民と行政が目的と課題を共有することにより、今ある自然を守るとともに、駅を降りると森が出迎え、自然の生態系に寄与する駅開発がなされることに繋がった。3年後にはオーク・グローブに完成する駅舎は終着駅ではなく、ポートランドへ向けての始発駅として完成する。

研修中に写真を撮っていると「日本から来たのか？マックスの写真を撮っているのか？」と車を運転中の女性から話し掛けられた。（自分は彼女の言葉をこのように理解した。）

「日本から来て、この事例を学びに来た」と答えると、「沢山写真を撮っていきなさい。」という返事が返ってきた。地域に住む人にとってこのプロジェクトは、今では誇りとなっているのではないかと感じられた。

駅を開業するという目的を達成するために、また、地域の住民が望む自然を活かした開発を進めるために、住民や住民組織、行政が連携し、目指す姿を共有してプロジェクトが築きあげられたアーバン・グリーンのケースを通じ、地域に愛着を持つ住民の声をいかにして酌み取りその要望を実現化していくか、また、行政としても一度決定した計画を地元のニーズに合わせて柔軟に対応し、当初の目的を達成していくかという事例を学ぶことができた。

地域の住民の声は多様であると思う。よいアイデアもあれば、そうでないものもあるかもしれない。まずは相手を尊重し、意見を出し続けさせ、活発な議論を行っていくことが良いアイデアが膨らんでいく秘訣であり、その話し合いの場こそが、地域の合意を生み出すプロセスであるとチップス氏から教わることが出来た。

そのためには、役場職員としてまずは現場に出向き、お互いの信頼関係をしっかりと築くこと。そして、そこにある問題や課題を把握し、小さな事、出来る事からスタートしていく。その小さな活動が成功していくことにより、住民に「自分達にも何か出来る」という新しい芽を生み出すことが村づくりには欠くことのできない要素であると感じることができた視察となった。



マックス駅建設予定地